

どの石塔墓で、かつ硬い安山岩、花崗岩を加工したものが造立された。現存するものだけでも、一三世紀末—一四世紀初頭のものが一〇〇を超える。しかも、その下には金銅製の骨蔵器が見いだされる。そうした、巨大石塔造立の背景にある、死後、まず極楽に往生し、五六億七千万年後の弥勒下生に際して墓にもどるといふ阿弥陀信仰と弥勒信仰の混交した仏教思想に注目した。

すなわち、五六億七千万年後という途方もない時間においても霊魂の依り代である骨を納めた墓を保たせるために、硬い石製の墓が生み出されたのである。

幽霊の誕生

——江戸時代における死者供養の変容——

佐藤 弘夫

太古の昔から、人は身近な死者が末期の苦しみから開放され、安らかな状況に至ることを願いつけてきた。死者は人間界とは異なる超越者の世界⇨他界の住人であるがゆえに、その安穩な境地への到達は、他界での安定した地位の獲得と不可分の関係を有していた。しかし、日本列島に限ってみても、他界のカミ観念、及び現世と他界の関係は、時代によって大きな変容をみせていた。そのため、死者の安寧を願うという一点において生者の思いは変わらなくても、その「安寧」の中身と供養の目的は、各時代のカミ観念・他界観に強く規定されることにな

った。

古代においては、死者の霊は死後速やかに遺体を離れると考えられた。霊が肉体に再び帰ることが不可能となった時点が、死の確定だった。したがって、古代の死者供養の中心課題は遺体そのものの処置ではなく、遺骸を離れてさまよう霊魂をいかに無害なものへと浄化していくかという問題だった。その有効な手段と考えられた「清浄」や「滅罪」が、古代の死者供養のキーワードとなった。

理想の浄土の観念が肥大化し、死後にそこに往生することが大方の人々の目標となる中世では、死霊を確実に彼岸世界へ送り届けることが死者供養の究極の目的と考えられた。人々を救うためにあえてこの世に留まることを選択した聖人を別にすれば、なんらかの理由でこの世に残る死者は、決して望ましい存在とはみなされなかった。

中世後期から、他界浄土の観念は一転して縮小に向かう。やがて、彼岸世界に対して現世の比重が著しく高まる近世社会が到来するのである。近世は、他方では永続する「イエ」が確立し定着していく時代だった。もはや遠い他界に旅立たなくなつた死者は、「イエ」の墓地にある骨と墓標を依代として、永久にこの世に留まるものと観念された。そのため、近世では死者供養の課題は、墓地に棲む霊魂の安らかな眠りの実現にあると考えられるようになるのである。

死者が一つの空間を生者と分かち合う点において、近世の世界観は古代のそれに通ずる性格をもっているようにみえる。しかし、安定したイエと永続する墓地を欠くがゆえに、比較的短

期間のうちに忘却の彼方に追いやられた古代の死霊に対し、庶民層までイエが拡充する近世社会では、固有名詞をもった供養の対象としての大量の死者が継続的に生み出されることになった。

社会の世俗化に伴い、神仏や死者の世界が後景に退いた近世社会では、不特定多数の死霊との日常的な接触は忌避すべきことと考えられた。そこで近世人は死者と契約を交わし、その墓地を日常的に読経の声が聞こえる寺院の境内に建立するとともに、彼岸やお盆などの折々に縁者が墓を訪れ、死者を家に招いた。死者はその代わり、普段は墓地に安住してさまよい出ないことを約束させられた。近世は現世の内部で、死者と生者の個別の契約にもとづき、両者の世界の厳密な分節化が成し遂げられた時代だったのである。

だがそれにも関わらず、近世では冷酷な殺人と死体遺棄、供養の放棄など、生者側の一方的な契約不履行は跡を絶たなかった。そのため、恨みを含んで無秩序に現世に越境する死者も膨大な数に上った。それら個々の死者は、例外なく明確な復讐の対象をもっていた。近世の幽霊はその遺恨の解消に絶対的な救済者を介在しない点において、救いから疎外されて苦しむ中世の死霊とは異質な存在だった。近世において、人間社会を反映する仮借なき怨念に満ちた大量の幽霊譚と怪談が生み出される背景は、ここにあったのである。

無遮と無主

——無縁供養の動態性——

池上良正

これまで発表者は「死者供養」を、東アジアで形成され民衆層に普及した、ユニークで動態的なひとつの「救済システム」として捉える視点を提示してきた。この視点に立てば、「死者供養」は仏教的な輪廻転生や追善回向の教説を中核としながらも、中国社会の儒教的な教説(とりわけ孝思想)や儀礼・祭祀様式、さらには在来の民衆習俗や道教的な理念などを吸収することによって醸成されたひとつの「救済システム」とみることが出来る。具体的には、「生者が一定の宗教的な功德を積み、その徳を死者たちに振り向けようとする行為は、(A)親孝行や先祖の孝養にもなれば、(B)何らかの未練や怨念を残した死者(苦しむ死者)たちの救済にもなる」という二面性が巧みに融合したのである。本発表では、とくに(B)を代表する「無縁供養」に注目してみたい。

「無縁」をめぐる仏教の教義的原義には二つの側面がある。

①「無遮」の側面と②「無主」の側面である。①は特定の対象がなく平等なことで、「無縁慈悲」などとして理念化され、無遮大会・無遮水陸齋などの儀礼に体现されてきた。②は仏縁のないこと、転じて、申う縁者がないことを意味し、「無主(無祀)孤魂」などの用例に代表される。今日の日本では、「無縁ボトケ」「無縁社会」など②の側面のみに光が当てられる現状があるが、宗教学・宗教史の観点から現代の「無縁」観の一面